

# さいころ茶屋 新聞

発行日：平成 29 年 5 月 14 日

発行元：さいころ茶屋（渦主）

ウェブサイト：<http://saikoro-tyaya.com/>

る業つ  
く作や  
つかかな  
集んな  
オない  
リのたい  
ナきみ  
シと場

(スペースがあまったのでヤケクソ)  
(ATOM のペイン分割がとても便利でしたという感想)  
(表紙などの絵は sai とクリップスタジオを使用しました)

ワールドエンドの  
ひとつまえ  
フォーセンティップ・  
ワールド・エンド前日譚

(シナリオの補完に使う素材などどうぞ。  
ネタバレがすごいです)

エテルナは、始めてそこで目覚めた時のことを覚えていた。ひび割れない天井、伸ばした手を覆い尽くす白いテープ、その先から伸びるいくつものコード、それを綺麗にまとめた結束バンドと、それから、その彼方に向いて、イージスの、泣き出しそうな笑顔だ。

イージスは全てを語った。

争いは終わったが、全てが失われたということ。それから、争いが終わる瞬間に、イージスだけが生き残ったということ。そして、エテルナを含む、子どもたちのこと。

イージスは、子どもたちを新たな種族として蘇らせるのだと言う。人間たちは、愚かな争いによって滅びてしまった。だが、新たな人種はそうしない。争わず、手を取り合い生きるのだ。

そう語るイージスの口調は、子供のようには弾んでいた。しかしエテルナは見た。そのイージスの瞳は濁っていたのだ。

目の前で、彼の希望であったすべて——子どもたち全員を失ったのだから、仕方ない、とエテルナはすぐに思った。諦めだった。それでも、エテルナは、彼の死んでしまった希望の残骸として、出来ることをし続けようと、心から思った。そういう風に作られているからだとか、そう思う機能があるから、などとは考えなかった。

イージスは語った。

「私は、子どもたちが生き延びられるようなエネルギーの研究をし続ける。だから、子どもたちの面倒を見ることがほとんどできなくなるだろう……」

だから、と続けたイージスの声を妨げて、エテルナは言った。

「大丈夫だよ、あの子どもたちの面倒は僕が見る。子どもたちの面倒など、なんの負担でもない。自分出来ることどころか、自分が好んで出来ることだった。それに、エテルナは子どもたちを愛していた。そこに苦が入り込む余地はない。」

だが、イージスはさらに言った。

「そして、もう一つ頼みがある。私は、私が正常であるか、わからない。間違いを起こしそうなときは、お前がその力で、私を止めるんだ」

エテルナは、自身の体に爆破装置があることを知っている。「その力」が指し示すものはそれしかない。新人種とは、きわめて人間に近い。エテルナは、瞬間的に、今ここで、それを作動させたいと思ってしまう。まっすぐあやまちに向かって進んでいるイージスを止めたいと思ってしまう。争わず、手を取り合い生きる新人種。その新人種に、ひとつの殺戮を望む矛盾。危険を孕んだ瞳。

だが、そうすれば、まだ目覚めていない子どもたちを覚めさせられる者はいなくなる。エテルナは子どもたちにもう一度会いたかった。イージスも、もしかすると、そのみを望んでいるのかもしれない。エテルナはなにもせず、深呼吸のみをした。そして、「わかったよ」と返事をした。エテルナは子どもたちを愛していたし、それに、父親のこともそうだった。

